

新しい星を見いだす喜び

三木メイ

奨励者紹介〔みき・めい〕

日本聖公会京都教区司祭

同志社大学神学部嘱託講師

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、

お前はユダの指導者たちの中で

決していちばん小さいものではない。

お前から指導者が現れ、

わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』

そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせしてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

(マタイによる福音書 2章1—12節)

コロナ禍という暗闇の世界を歩む

新しい年を迎えました。皆さま、新年おめでとうございます。お正月にご家族と共に新年を祝い、新たな気持ちで2021年を歩んでいく心の準備は整えられたでしょうか。ただ、今年はコロナ禍のために実家に帰省できなかった人や、お正月恒例の集まりを中止したという人も多かったのではないかと思います。年末から昨日まで、1日の感染者数、重症者数が過去最多となったというニュースが続いています(1月5日の感染者4919人、死亡者76人、いずれも過去最多)。明日には、日本政府が首都圏の1都3県への限定的な緊急事態宣言を発出する予定と聞いています。誰もが今年こそは早く新型コロナウイルス感染症が収束してほしいと願っていますが、先々の状況は不透明なままと言わざるをえません。ワクチン接種による感染縮小の希望が語られる一方で、これまでより強い感染力をもつ変異ウイルスがすでに国内

に入っていることが確認されています。生命の危機と経済的困窮とが多くの人々を脅かしています。この状況の中であって、私たちは現実をしっかりと見据えながら、不安と恐れに振り回されないように、自分の心をよく見つめて、何を大切に、どんなヴィジョンをもち、何をなすべきか、その方向を見いだすことが極めて重要です。

苦難を乗り越える古代の人々の知恵

聖書を書き記した古代の人々は、さまざまな苦難に直面していながらも、それを乗り越えるための知恵を、後世の人々に伝えようとしています。その苦難は、洪水、干ばつなどの自然災害、民族間の戦争や紛争、権力争い、貧困や病気、差別や暴力、人間の憎しみや妬みによるものなど、実にさまざまです。

皆さんはコロナ禍になってからいきなり全く想像していなかった状態に驚き、思いどおりにならない事態にイライラしたり、落ち込んだりしたろうと思います。当然です。しかし、ある歴史学者は言っています。「想像もしていなかったことが次々起こる。それが歴史なのよ」。そうなのです。日々の自分の生活のことだけを考えると、「こんなことは想像もしていなかった」「困った、困った」となりますが、視点を過去に移して人間の歴史をよく見てみると、それぞれの時代で当時の人々にとっての想定外の出来事が起こり、それによって社会のあり方が変わったり、その出来事から学んで新しい仕組みを考案したりして、新たな歴史が作られているのです。その歴史の1コマに私たちは直面しているわけです。

大学で一般教養を身につけるのが大切なのは、自分の置かれている状況を近視眼的に捉えるのではなく、広い視野と洞察力をもって状況を判断して、自分が今何を大切に考え、何をなすべきか、新たなビジョンをどう描くか、それを自分で見いだしていけるようになるためだと私は思います。聖書はそのためにも貢献できる書物です。先人の知恵と経験が込められているからです。

聖書は、古代の人々の神への信仰の歴史が、実際の歴史的出来事や物語、教え、預言、歌や詩などを通して綴られています。そこには大切なメッセージを後の時代の人々に伝える、という共通の目的があります。そしてそれが信仰の歴史であるからこそ、古代の人々が目の前の苦難や危機をどのような気持ちで乗り越えようとしたかが分かります。苦難に満ちた状態の中で、希望の光を見いだした人々の物語の一つを見ていきましょう。

1月6日は顕現日(公現日)＝「エピファニー」

今日1月6日は、教会暦では、顕現日(または公現日)「エピファニー」です。「エピファニー」は、元来は王様が公に現れるという意味の言葉です。それをキリスト教会では、神の子としてのキリストが公に現れたことを記念する日＝「エピファニー」というようになりました。東方正教会では現在でもこの1月6日に「公現祭」という祝祭日の礼拝を行っていて、先ほど読んでいただいた聖書箇所が読まれることになっています。1月6日までが降誕節なので、教会のクリスマス飾りは6日以降に片付ける習慣があります。

まずこの公現祭(エピファニー)の歴史について少し説明しておきましょう。公現祭は、12月25日にクリスマスを祝うようになった4世紀よりももっと昔から行われています。そして、古代においては、公現祭でイエスの洗礼を記念する礼拝をしていたそうです。その由来をたどって歴史を遡ってみると、ユダヤ教ともキリスト教とも違う古代宗教の伝統が影響しています。古代のエジプトでは、1月5日の夜から6日にかけて

て、太陽神アイオンの誕生を祝う儀式をしていたのですが、それに続いてナイル河で救いの水をくむ儀式をしていたそうです。その儀式の慣習を3世紀頃にキリスト教のある一部の派が受け継いで、1月6日から10日頃に、イエスの洗礼を祝う礼拝を行うようになったのです。彼らは、「洗礼」の出来事をキリストの受胎と誕生と理解しました。ですから、公現日（エピファニー）の由来はエジプトからで、昔はイエスの洗礼と誕生を同時に祝う日とされていたそうです。洗礼によって公に神の子・救い主としてのイエスが人々の前に現れてきたことを祝う1月6日。それが12月にキリストの誕生＝クリスマスを祝うようになった西方教会では、1月6日は東方の3人の学者の物語を読んで、主が公に現れたことを記念する日となっていたのです。とにかく、公現日（エピファニー）の起源や歴史を見てみると、他の宗教やさまざまな地域の教会での慣習が入り交じってお互いに影響を与えながら、複雑に変化してきているのが分かります。

「神の子・メシア」を探る東方の学者たち

今日の聖書の物語の中に、東方からきた占星術の学者たちが登場してきます。この物語はそのまま歴史的事実ではないとしても、モデルとなった人たちはいたはずで、それは古代ペルシャ（現在のイランのあたり）のゾロアスター教の祭司たちだったのではないかと、という説があります。「ゾロアスター」というのは、教祖ザラスシュトラのギリシャ語読みの名前で、ドイツ語読みは、「ツァラトウストラ」。ニーチェの『ツァラトウストラかく語りき』という題名の書物で有名です。このザラスシュトラが存在したのは、紀元前1500～1000年頃だろうとされていて、ユダヤ教が成立するよりもかなり前です。イスラエルの民がバビロン捕囚となっていた時代に、ゾロアスター教はメソポタミア地方にも広がっていて、捕囚の民もその影響を受け、後にキリスト教もこの宗教の影響を受けたと言われています。ゾロアスター教は、紀元後3世紀から6世紀後半に栄えたササン朝ペルシャの国教になった宗教でもあり、一時はかなりの勢力をもっていたようです。

この宗教には「アヴェスター」と呼ばれる経典があります。至高の神のアフラ＝マズダーは善なる神で、まず天地や人間を創造します。しかし一神教ではなくて、悪なる神もいて、善を選ぶか、悪を選ぶかは人間の自由意志に託されています。善と悪が混在している世にあって善なる行いを選んだ者は、最後の審判によって神の国に入れられて、永遠の命を得る、そして悪行を行った者は地獄に落ちる、だから善なる神の導きに従え、という教えです。そういった信仰内容は、キリスト教と少し似ている部分があります。そして、救世主が千年に一度現れるという信仰もあったようです。ゾロアスター教の祭司は、天文学や薬学などに通じていた、という説もあります。ですから、彼らが占星術によって救い主の誕生を予知しようとしていた、ということは事実あったのかもしれませんが。人間は、いつの時代でも、未来に何が起こるのか、前もって知りたいという欲求をもっているものです。だから、現代人の皆さんも占いが好きですよ。どうしたらいい運気を得られるのか、とか。よく当たる占い師の人気の高いのも、人間が本能的に未来を知りたい欲求をもっているからなのでしょう。

暗闇の世界に「希望の光」を見いだす

先ほどの東方から来た学者たちの物語をよく読むと、いろいろ矛盾するところがあります。占星術の学者たちが「東の方から」（つまりユダヤ人ではない）エルサレムにやってきて「ユダヤ人の王としてお生ま

れになった方はどこにおられますか」と尋ねています。この学者たちが「ペルシャ人の王」として生まれた神の子を探していたら何となく理解できますが、なぜ「ユダヤ人の王」となると信じたのか、その根拠は聖書には明らかにされていません。しかもこの後、彼らはヘロデ王にどこに生まれたかを聞いていて、ユダヤの祭司長たちが預言書によって「ベツレヘムです」と答えた、ということはこの学者たちは聖書の存在も知らない、という前提になっています。そして、救い主のいるところは、星が学者たちに先立って進んで教えてくれたというのですが、それならなぜわざわざヘロデ王のところへ行って尋ねたのか、そんな必要はなかったのでは、と聞いてみたいですね。これはやはり、マタイによる福音書の記者が、「イエスこそ神が約束された救い主」「ダビデ王家の血を引くユダヤ人の王として来た神の子だったのだ」ということをこれを読む人々に伝えなかった、という明確な意図があったから、ということでしょう。

しかし、実際の歴史の出来事としては、当時のユダヤ社会の指導者たちはイエスを神の子・救い主と認めないばかりか、「ユダヤ人の王」という罪状と共に十字架につけて殺してしまいました。その苦難に満ちた未来が、残忍で狡猾なヘロデ王の存在によって象徴的に示されています。イエスがこの世にやってきた、そのことを「その星を見て喜びにあふれた」人々と、全く逆に亡き者にしなくては、と恐れた人々がいた、という事実がうまく表現されています。この物語が語り伝えられた頃は、すでにイエスは殺された後で、イエスを救い主とは信じないユダヤ人の方が多かったでしょう。そして、死刑囚として殺されたイエスを神の子と信じた初代キリスト教会の人々は、キリスト教迫害という危機に直面していました。しかしその一方で、イエスを神の子・救い主と信じる信仰が、ユダヤ人以外の人々の間に広がっていったのです。その喜びの事実がこの物語には込められています。暗闇の中に光る星。それは命の危機を伴う苦難における希望の光です。苦難の中にあるからこそ、ますます強く希望の光を見いだす力をもって、この物語は語られているのです。

新しい「光」を見いだす喜びを

思いどおりにはいかない苦難に満ちた人生ですが、その人生における希望の光をどこに見いだすのか、どうやって見いだすのか。それは向こうから勝手にやってくるのではなくて、自分から探し出し、見いださなくてはいけないのです。そして、真実の希望の光は、私たちに進むべき道を教え、喜びを与えてくれるのだ—そういうメッセージがこの物語には込められているのではないか、と思います。

キリスト教はその最初の時から、救いの希望という喜びと、この世におけるさまざまな苦難を併せ持ちながら、歴史を刻んできました。それでも、この2000年の間に、人種も民族も文化も環境も気候も異なる、世界のあらゆる地域に、時代を越えてキリストの物語が語られ続けてきたのは、とても不思議な歴史的事実です。いろんな他の宗教の影響を受けて変化しつつも、普遍的に変わらない真理のメッセージが、この聖書の物語の中に隠されています。イエス・キリストがこの世に現れたことによって、その真理が、2000年後に生きる私たちにも明らかに示されることになりました。

新しい年を迎えたこの時、私たちは将来に向けてさまざまな不安や恐れ、悩みを抱いていますが、神様に与えられたすべての恵みに感謝しながら、希望の光を見いだすために歩みだしていきましょう。あの3人の占星術の学者たちのように、暗闇の中に新しい星を見つけて、喜びにあふれて旅をしていきましょう。

2021年1月6日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録